

法然と親鸞の比較研究

龍ヶ江良俊
L090085

目次

序論	1
本論	2
第一章 善導の称名念仏と信心の理解	2
第一節 称名念仏	2
第二節 信心	4
第二章 法然の称名念仏と信心の理解	6
第一節 称名念仏	6
第二節 信心	9
第三章 親鸞の称名念仏と信心の理解	13
第一節 称名念仏	13
第二節 信心	17
第三節 法然と親鸞の思想の差異についての検討	11
第一項 称名念仏による差異	11
第二項 信心による差異	14
結論	26

序論

今回、法然と親鸞の思想を比較検討していく。その理由は、師である法然とその弟子である親鸞には、教学的な差異がみられると言われているが、はたして法然と親鸞の教学は、どのような関係にあるのか、またそこまで大きな差があるのであるのか。

その疑問に対していくつかの可能性が考えられる。その可能性については左記に示すこととする。

- 法然の教えをそのまま受け継いでいるのか。
- 法然の教えをそのまま受け継ぎ、さらに展開されたのであろうか。
- 法然の教えを必要などころだけを一部受け継がれたのだろうか。
- 法然とは全く違うことを説いているのか。

現段階では、法然の教えをそのまま受け継ぎさらに展開されたのか、必要な教えだけを一部受け継がれたという可能性が高いと考える。もし同じことを説いているとするのであれば、宗名は浄土宗でいいのではないだろうか。今日、わざわざ浄土真宗と名のついているところが違うという証ではないだろうか。さらに法然の教えと全く違うのであれば法然の弟子にはなっていないと考えるからである。

そのようなことを見ていくに当たり、今回、称名念仏と信心に注目する。その理由は、法然も親鸞も称名念仏を重要視しているため、親鸞は信心の方を重要視しており、法然と親鸞を比較することで法然はどのように信心を捉えていたのか、また親鸞は法然と同じように称名念仏を捉えていたのかということについて検討していく。

さらに法然が自ら選んだ念仏の師である善導も参考にしながら考察していく。

以下本論では、第一章においては善導の称名念仏と信心の理解を示す。第二章は善導の理解をふまえ法然の称名念仏と信心の理解を論じていく。その後、第三章より親鸞について法然と比較しながら称名念仏と信心理解についてまとめていく。

本論

第一章 善導の称名念仏と信心の理解

第一節 称名念仏

まずここでは、称名念仏が正定業であることについて考えていく。善導は称名が正定業であることを『観経四帖疏』（以下『観経疏』とする）の「散善義」の深心釈に示された。それは、

次に行に就きて信を立つといふは、行に二種あり。一には正行、二には雑行なり。正行といふは、もつばら往生経によりて行ずるは、これを正行と名づく。（中略）またこの正のなかにつきて二種あり。一には一心にもつばら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず念々に捨てざるは、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるがゆゑなり。もし礼誦等によるをすなはち名づけて助業となす。この正助二行を除

きて以外の自余の諸善はことごとく雑行と名づく。もし前の正助二行を修すれば、心つねに「阿弥陀仏に」親近して憶念絶えず、名づけて無間となす。もし後の雑行を行ずれば、すなはち心つねに間断す、回向して生ずることを得べしといえども、すべて疎雑の行と名づく。¹

と説かれている。このことからまず「正行」と「雑行」があることがわかる。正行とは「五正行」のことであり、その他のものを雑行であると説いた。また五正行とは読誦、観察、礼拝、称名、讚嘆供養のことであり、その中でも称名が「正定業」であると説き、称名以外の行は「助業」であるとした。また、もし雑行を行ずれば、浄土に往生することができないと説いている。このことから称名念仏が正定業であるとされる。

ではなぜ称名念仏が正定業であるのか。「南無阿弥陀仏」の六字を称することにどのような意味があるか。このことについては「玄義分」の六字釈に、

『観経』のなかの十声の称仏は、すなはち十願十行ありて具足す。いかんが具足する。「南無」というはすなはちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。「阿弥陀仏」といふはすなはちそれこの行なり。この義をもつてのゆゑにかならず往生を得。²

とあり、南無とは帰命であり、発願回向であると述べている。つまり南無とは心から信じ敬い、心から従うことであり、浄土往生を願うことである。また、『仏説無量寿経』（以下『大経』とする。）の第十八願により「乃至十念」。せよと願われた往生の行として阿弥陀仏が定められたものであることで、阿弥陀仏とは行そのものであるのだ。このことにより南無阿弥陀仏という名号に願と行が具足していることがわかる。往生するには願と行が

不可欠である。その理由は往生するためにはどこに往生したいかということを決めなければならず、また往生するためには行が必要であるということである。すなわち、善導の称名念仏観は、願行具足の念仏を称えることで浄土往生を目指し称名行を行っていたと考える。

第二節 信心

善導の信心観とは、『観経疏』の「散善義」に三心の解釈によって示されている。三心とは、『仏説観無量寿経』（以下『観経』とする。）の上品上生釈に、

もし衆生ありて、かの国に生ぜんと願ずるものは、三種の心を発して即便往生す。なんらをか三つとする。一つには至誠心、二つには深心、三つには回向発願心なり。三心を具するものは、かならずかの国に生ず。

4

と、説かれている。このことから善導は三心が浄土往生に重要なことであると明かした。この三心を「散善義」で詳しく説き明かしている。まず至誠心の解釈である。善導は至誠心とは、

「一には至誠心」と。「至」とは真なり、「誠」とは実なり。一切衆生の身口意業所修の解行、かならずすべからく真実心のうちになすべきことを明かさんと欲す。外に賢善精進の行を相を現じ、貪瞋・邪偽・奸詐百端にして、悪性侵めがたく、事蛇蝎に同じきは、三業を起こすといへども名づけて雑毒の善となし、また虚仮の行と名づく。この雑毒の行を回して、かの仏の浄土に生ずることを求めんと欲せば、これ必ず不可なり。

5

と説かれている。このことから至誠心とは真実心であり、その真実心とは外や内つまり行や心から浄土往生にむけ日々務める心を説いている。また、どれほど行をしているからといって真実心がないと浄土往生できないことを説いている。

次に深心の解釈についてである。深心とは、

「二には深心」と。「深心」といふはすなはちこれ深く信じる心なり。また二種あり。一には決定して深く、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没しつねに流転して出離の縁あることなしと信ず。二には決定して深く、かの阿弥陀仏の、四十八願は衆生を撰受したまふこと、疑いなく慮りなくかの願力に乗じてさだめて往生を得と信ず。⁶

8

と説かれている。このことから、深心とは深く信じることである。また深心には二種あり、一つは機の深信であり私たち衆生は罪悪深重の凡夫であり、無限の過去より迷いの世界から離れ出ることができなくなっており、自力によってさとりを開くことができないことを深く信じることである。またもう一つは法の深信である。このような凡夫が阿弥陀仏の誓願によって必ず浄土往生できること深く信じることである。さらにこの二種は一つの深心であり、まとめると、罪悪深重の凡夫である私たちがこのまま、まちがいに阿弥陀仏によって救われるということを深く信じる心のことである。浅井成海氏は深心釈中に説かれる就行立信釈により「正行と雑行に分け、また正行の中に正定業と助業とを分け、称名念仏こそが正定業であり、本願の行であり、この正助二行以外の諸

7

善はすべて雑行であり、疎雑の行に過ぎない、と説いている。そしてそのことを信じるのが深心である」⁷と示された。このことから阿弥陀仏のことだけを信じるのではなく、「念仏によって往生することを深く信じる」ということが善導における深心の理解である。

最後に、回向発願心の解釈についてである。回向発願心とは、

「三には回向発願心」と。「回向発願心」といふは、過去および今生の身口意業所修の世・出世の善根と、および他の一切凡聖の身口意業所修の世・出世の善根を随喜せると、この自他の所修の善根をもって、ことごとくみな真実の深信の心中に回向して、かの国に生ぜんと願ず。ゆゑに回向発願心と名づく。⁸

と説いている。このことから回向発願心とは過去世および今生において自分の積んだ善根や、他人の積んだ善根を喜び、それを真実の深信をもって往生のためにふり向ける心のことである。

つまり善導の三心とは真実心をもって浄土往生に向け精進し、私たちが罪惡深重の凡夫であることを知り、そんな私たちを救うと誓った阿弥陀仏を深く信じ、過去世および今生につんだ善根を阿弥陀仏の浄土にふり向ける心のことである。浅井氏は「念仏によって往生することを深く信じるのが深心であり、その心が真実であるのが至誠心であり、念仏によって往生しようと思うことが回向発願心ということになる。」と善導の三心について示されたものであると言っている。

第二章 法然の称名念仏と信心の理解

第一節 称名念仏

法然の称名観について考察する。『選択本願念仏集』（以下『選択集』とする。）の「三選の文」¹において、「正定の業とは、すなはちこれ仏名を称するなり。名を称すれば、かならず生ずることを得。仏の本願によるがゆなり。」¹と説かれた。称名を「正定業」として扱い、この文について石井教道氏は

正定業とは、仏の選定されたものであり、また、決定往生の行為という意であるが、それは即ち南無阿弥陀仏と称える事である。この正定業の念仏を修すれば、決定して往生することができる。それは唯、彼の阿弥陀仏が選択して正因本願となし給うた行であると結論されたのである。¹²

と述べられている。つまり、「三選の文」において聖道門を闊いて浄土門に入り、雑行を抛てて正行に帰し、助業を傍らに正定業である「称名念仏」を称すれば必ず往生できるとした。なぜなら、阿弥陀仏の本願によって選びとられた教え¹³であるからであるとされている。

ここからは称名が正定業であることと、称名念仏の徳について考察していく。「三選の文」について『選択集』の「二行章」「本願章」を見ていく。まず「二行章」に関しては、私積で、

往生の形相を明かすといふは、善導和尚の意によらば、往生の行多しといへども大きに分ちて二となす。一には正行、二には雑行なり。初めの正行とは、これにつきて開合の二の義あり。初めの開を五種となし、後

の合を二種となす。初めの開を五種となすといふは、一には読誦正行、二には觀察正行、三には礼拝正行、四には称名正行、五には讚嘆供養正行なり。(中略)次に合を二種となすといふは、一には正業、二には助業なり。初めの正業は、上の五種のなかの第四の称名をもつて正定業となす。(中略)問いていはく、なんがゆゑぞ五種のなかに独り称名念仏をもつて正定の業となすや。答えていはく、かの仏の願に順ずるがゆゑに。¹⁴

と説かれている。梯實圓氏は「法然は、称名が正決定の行業でありうるのは、阿弥陀仏が本願において「正しく往生行として選定された行業」であるからであるとみなされてた。」¹⁵と指摘される。つまり本願は阿弥陀仏が法蔵菩薩の時に誓ったものであるから、阿弥陀仏が称名念仏を選び取ったということになる。そのため「二行章」では、五正行の中の称名念仏で必ず往生できる正定業であるということが明かされている。

次に「本願章」に、

しかりといへどもいま試みに二の義をもつてこれを解せば、一には勝劣の義、二には難易の義なり。初めの勝劣とは、念仏これ勝、余行これ劣なり。所以はいかんとならば、名号はこれ万徳の帰するところなり。(中略)次に難易の義とは、念仏は修しやすし、諸行は修しがたし。(中略)念仏は易きがゆゑに一切に通ず。諸行は難きがゆゑに諸機に通ぜず。(中略)しかればすなはち弥陀如来、法蔵比丘の昔平等の慈悲に催されて、あまねく一切を撰せんがために、造像起塔等の諸行をもつて往生の本願となしたまはず。ただ称名念仏一行をもつてその本願となしたまへり。¹⁶

と説かれている。まず、「勝劣の義」である。称名念仏するその名号には阿弥陀如来の一切の功德が具わっている。その名号の念仏は、無量の徳をもっているため、最勝の行なのである。また諸行は阿弥陀仏の功德のひとつひとつを修行し、仏のさとりひとつひとつを莊嚴するようなものであるため劣である。また名号には称えるものを阿弥陀仏の報土へと生れさせようという本願により、名号が称える衆生の無明を破る。その本願力のはたらきにより決定往生させられるのである。¹⁷と示された。

次に「難易の義」¹⁸についてである。勝行とは万徳の所帰であり、阿弥陀仏の名号にそれを称えることで本願力により漏らすことなく救われる働きのことである。万機を平等に救おうとする阿弥陀仏の称名念仏は凡夫である人間が必ず救われる易行であるとされた。また、そのような易行であるが故に、勝行だといえる。「本願章」では「仏の本願によるがゆゑなり。」¹⁹ということがこの勝易の二義により示されたのである。以上のことより、「名を称すれば、かならず生ずることを得。仏の本願によるがゆゑなり。」¹⁹という一文に、法然の称名念仏の意義が集約されているのである。

第二節 信心

法然の信心について『選択集』の「三心章」に、『観経』の「三心」、善導の『観経疏』「散善義」の三心、『往生礼讃』(以下『礼讃』とする。)の「安心」を用いている。それに関して、「三心章」のはじめに、「念仏の行者

かならず三心を具足すべき文。²⁰」と顕しており、私積において

引くところの三心はこれ行者の至要なり。所以はいかんぞ。『経』（観経）にはすなはち、「具三心者必生彼国」といふ。あきらかに知りぬ、三を具すればかならず生ずることを得べし。『釈』（礼讚）にはすなはち、「若少一心即不得生」といふ。あきらかに知りぬ、一も少けぬればこれさらに不可なり。これによりて極楽に生れんと欲はん人は、まつたく三心を具足すべし。²¹

と説かれた。つまり念仏者は一つも欠けることなく三心を具足する必要があると示した。

まず『選択集』に説かれる三心について検討する。「三心章」の善導の三心をについて私積に、

「至誠心」とはこれ真実の心なり。その相、かの文（散善義）のごとし。ただし「外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐く」といふは、外は内に対する辞なり。いはく外相と内心と不調の意なり。（中略）外には精進の相を示し、内にはすなはち懈怠の心を懐く。もし外を翻じて内に蓄へば、まことに出要に備ふべし。「内に虚仮を懐く」と等とは、内は外に対する辞なり。いはく内心と外相と不調の意なり。（中略）内は仮、外は真なり。もしそれを翻じて外に播さば、また出要に足りぬべし。²²

とある。善導の『観経疏』について、「至誠心」は真実心であることを示し、「外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐く」という箇所について補釈されている。これについて、浅井氏は

「外に賢善精進」とは、内の愚悪懈怠の心と対応するのであり、外を翻して内に蓄えば出離の要道であることを説く。「内に虚仮を懐く」ということは、外の真実と対することであり、内を翻して外に播さば出離の

要道を満たすと解釈する。²³

と述べられている。つまり「外に賢善精進の相を現じ、」とは外である賢善精進の相（念仏）を内に蓄える事が出来るならば救われるということである。また「内に虚仮を懐く」とは愚悪である内を外に播し愚悪となっても愚悪のまま救われるということである。²⁴つまり自身のかざることはないありのままの心で念仏もうすことが至誠心である。

次に「深心」とは、「深心」とは、いはく深信の心なり。まさに知るべし、生死の家に疑いをもつて所止となし、涅槃の城には信をもつて能入となす。ゆゑにいま二種の信心を建立して、九品の往生を決定するものなり。²⁵と説かれた。「深心」とは二種深信のことであることを示された。生死輪廻にとどまるのは本願を疑うからであり、本願を信じることで阿弥陀仏の浄土へ往生できることを説いた。²⁶また「深心」が往生の因となることを示した。

「回向発願心」については、「回向発願心の義、別の積を俟つべからず。²⁷と述べられた。つまり、「回向発願心」とは善導によってすでに説かれたことである。善導は回向発願心とは過去世および今生において自分の積んだ善根や、他人の積んだ善根を喜び、それを真実の深信をもって往生のためにふり向ける心と説いている。つまり法然の三心は善導の三心を基本として阿弥陀仏の第十八願に順じ、凡夫である衆生が往生決定できることを説いているのである。

また『大胡太郎実秀へつかはす御返事』にこれらの三心が、「三心を意えわかかつ時は、かくのことく別々なる

様なれども、詮ずるところは、真実の心をこして、ふかく本願を信じて、往生をねがふ心を、三心具足の心とは申也²⁸。」と説かれる。つまり三心が別々のように説かれるが、真実の心をおこして深く本願を信じ、往生を願う心が三心具足の心なのであると一つの心にまとめられたのである。

さらに、『三部経大意』に「三心區二分レタリト云ヘトモ、要ヲ取り詮ヲ撰テ是ヲイヘハ、深心□□（ヒトツ）オサマレ□（リ）²⁹。」と説かれた。三心が、深く本願を信じる心である深心の一心におさまるのである。

またその深心について『大胡太郎実秀へつかはす御返事』に、

煩惱こきうすきをかへりみず、罪障のかるきおもきをも沙汰せず、たゞ口に南無阿弥陀仏となへむこゑにつきて、決定往生おもひをなすへし。その決定の心をやがて深心とはなづくる也。その深心を具しぬれば、決定して往生する也。詮ずるところは、とのもかくにも念佛して往生すといふ事を、ふかく信じてうたがはぬを、深心となづけて候なり。³⁰

と説いた。すなわち決定心は深心であり、深心を具えたら、必ず往生することを説いている。つまり法然の三心は決定心である深心におさまるのである。このことに浅井氏も

往生するためには三心が必要であるが、その三心は念仏すること自然に備わるものであり、それは深心という決定往生の一心におさまる。この決定心があるときかならず往生するのであり、この決定心がなければ往生は不定である³¹と示している。

次に、同氏は信心が自然に具わるものと指摘される。それは、『十七條御法語』『乘願上人傳説の詞』より、

彼物今現在成仏等ノ釈ヲ信シテ、一向ニ名号ヲ称スヘキ也ト云。タタ名号ヲトナウル、三心オノツカラ具足スル也ト云リ。³²

人目をかざらずして、往生の業を相續すれば、自然に三心は相續する也。³³

と説いた。三心は念仏することにより自然に具足するものであることがわかる。つまり深心は念仏により自然に具足できるということである。さらに同氏は、

如来の願心を知らされることこそ、信心であり、その如来の願心に気付かせる装置が念仏なのである。だからこそ、念仏すれば必ず三心は具足する。なぜなら、それが阿弥陀仏の願いだからである。一切衆生を必ず救うという阿弥陀仏の願いによって、成就された三心であり、念仏であるから、念仏すれば自然に信心を具足するのである。³⁴

と示されている。つまり三心とは阿弥陀仏の願いによって選び取られた称名念仏をすることで自然に信心を具えることができるということである。

第三章 親鸞の称名念仏と信心の理解

第一節 称名念仏

親鸞の称名念仏観について『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』とする。）の「顕浄土真実行文類」（以下「行文類」とする。）において考察していく。まず「行文類」に、

大行とは無碍光如来の名を称するなり。この行はすなはちこれもろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極即円満す、真如一実の功德宝海なり。ゆゑに大行と名づく。しかるにこの行は大悲の願（第十七願）より出でたり。すなはちこれ諸仏称揚の願と名づく、また諸仏称名の願と名づく、また諸仏咨嗟の願と名づく、また往相回向の願と名づくべし、また選択称名の願と名づくべきなり。³⁵

と説かれる。つまり大行とは無碍光如来の名を称することである。その理由は村上速水氏によると「万善が円満しているという意味で大行」³⁶と述べている。また第十七願によりあらわされたと示された。第十七願とは『大経』に「たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名を称せずは、正覚を取らじ。」³⁷である。つまり、諸仏に名号を讃嘆し称名させたいという願である。さらに梯氏の説を補足すると、「諸仏が名号を讃嘆し、称名せよと勧められたことよって、人びとの選択本願の大行であることを知らしめられている」³⁸とされている。

次に、「称名破満積」について考察していく。「行文類」に、
名を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。称名はすなはちこれ最勝真妙の正業なり。正業はすなはちこれ念仏なり。念仏はすなはちこれ南無阿弥陀仏なり。南無阿弥陀仏はすなはちこれ正念なりと³⁹。

と示された。まず「名を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。」とは、称名によつて衆生のすべての無明煩惱を破り、衆生の一切の願いを満たすということである。また称名は、最勝真妙の正業であり、正業は念仏であり、念仏は南無阿弥陀仏、つまり名号であり、名号は正念⁴⁰ということである。これについて、村上氏は、「大行の本質は名号であつたのと同じく、今、称名に破満の徳があるといつても、衆生の称えるという行為によつて破闍満願するのではなく、名号そのものに破満の徳があるとするのである。」⁴¹と述べている。つまり、名号の破満の徳⁴²により念仏すると、無明煩惱の心を破することができ、信心が生じるということがここに記されているのである。

また、親鸞は不回向の行について説く。それは「行文類」に、
これ凡聖自力の行にあらず。ゆゑに不回向の行と名づくなり。大小の聖人・重軽の悪人、みな同じく斉しく選択の大宝海に帰して念仏成仏すべし。⁴³

と説かれる。はじめの「これ」とは、念仏のことを指している。不回向の行とは、村上氏は「称名念仏は凡夫や聖者が自身の力によつて称える念仏ではなく、如来の法が衆生の口頭に顕われ出るところの他力回向の念仏に外ならぬ。」⁴⁴と述べられる。つまり不回向の行とは、阿弥陀仏の他力によつて私たち衆生を救おうと声を通して顕われているから、私たちに由る回向ではないということである。また、「念仏成仏」については、梯氏は「行信は成仏の因であり、真実報土は無上涅槃の境界であるから、往生は即成仏であると領解されたのです。」⁴⁵と述べられている。また、灘本愛慈氏は「念仏は真実報土の往生を得る。真実報土は即成仏である」⁴⁶と述べられ

た。つまり、本願に帰し、不回向の称名念仏により往生し、即の時に成仏するということである。

次に「行信利益」についてである。「行文類」に、

真実の行信を獲れば、心に歓喜多きがゆゑに、これを歓喜地と名づく。(中略) いかにはんや十方群生海、この行信に帰命すれば撰取して捨てたまはず。ゆゑに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力といふ。ここをもつて龍樹大士は「即時入必定」といへり。曇鸞大師は「入正定聚之數」といへり。仰いでこれを憑むべし。もつばらこれを行すべきなり。⁴⁷

と説かれた。「真実の行信を獲れば」「行信に帰命すれば」とは阿弥陀仏により行信を与えられていることを衆生側からのべたものである。⁴⁸また歓喜地とは、灘本氏は「たとい憂悲苦惱のまったただ中にあつても、撰取不捨の益をえて往生成仏すべき身に定まっている。そのような地位に定まったこと」⁴⁹、という指摘もある。つまり、行信を与えられたならば煩惱具足である衆生のまま正定聚の位に定まっているということである。これが阿弥陀仏の他力である。

また次に「両重因縁」についてである。「行文類」に

徳号の慈父ましまさずは能生の因闕けなん。光明の悲母ましまさずは所生の縁垂きなん。能所の因縁和合すべしといへども、信心の業識にあらずは光明土に到ることなし。真実信心の業識、これすなはち内因とす。

光明・名の父母、これすなはち外縁とす。内外の因縁和合して報土の真身を得証す。⁵⁰

と説かれた。徳号の慈父とは、名号は如来の徳のすべてがこもっており、これが往生の業因となるはたらきを示している。一方、光明の悲母とは、如来が衆生を撰取して護られるはたらきを縁とされている。しかし、これらの因縁だけでは往生できないことを説くのである。それは、これらを疑いなく信じ受け取る心である信心を得なければ往生できないことを示されるのである。その信心を父と母との間に生まれる子のように業識と例えられるのである。信心を因とされ、光明、名号を外から加わる法の縁としこれらの因縁がそろふことで往生できることを説いたのである。つまり、初重の因縁は名号の因と光明の縁にだけでは往生できないことを説いている。また後重の因縁は名号と光明が法の外縁となり信心が内因となることで真実報土へ往生できることを説いているのである。⁵¹

第二節 信心

親鸞の信心について『教行信証』の「顕浄土真実信文類」(以下「信文類」とする。)を基に考察していく。「信文類」の初めに

つつしんで往相回向を案ずるに、大信あり。(中略) この心すなはちこれ念仏往生の願(第十八願)より出でたり。この大願を選択本願と名づく、また本願三心の願と名づく、また至心信樂の願と名づく、また往相信心の願と名づくべきなり。しかるに常没の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じがたきにあらず、真実の信樂まことに獲ること難し。なにをもつてかゆゑに、いまし如来の加威力によるがゆゑなり、博く大悲広慧の力によるがゆゑなり。⁵²

と説かれている。親鸞の信心は第十八願に説かれる至心、信樂、欲生の三心であることがわかる。また自分の能力によって信心を獲ようとすることは阿弥陀仏の浄土へ往生するということが難しいと説いている。その獲ることが難しい信心とは如来回向の信心であるために私たちが得ようと思い得られるものではないことを示された。ここについて梯氏は、

真実の信心を得れば、成仏の果は自然に成就することであって、人間のはからいを差し狭む余地はまったくない（中略）その獲る事が至難であるような信心とは、人間のはからいによっておこすことが絶対にできないことを表しており、如来回向の信心であることをしめしています。（中略）信樂を得ることが至難であるのは、如来が加えたまう威神力によってのみ私のうえに実現してくるような信心であり、一切の衆生を救おうと願う広大無辺な大悲智慧の力によってのみ恵まれる信心である。⁵³

と示されている。

次に三心について考察していく。まず「至心」について「信文類」の「法義釈」に、

如来、清浄の真心をもつて、円融無礙不可思議不可説の至徳を成就したまえり。如来の至心をもつて、諸有の一切煩惱悪業邪智の群生海に回施したまへり。すなはち利他の真心を彰す。ゆゑに疑蓋雜はることなし。この至心はすなはちこれ至徳の尊号を体とするなり。（中略）この心はすなはちこれ不可思議不可説不可説一乗大智願海、回向利益他の真実心なり。これを至心と名づく。⁵⁴

と説かれた。至心は名号を聞くとところに与えられる法の徳であり、至心の体は名号に外ならないことを示される。

至心の体が名号であるということは、三心全体が名号に外ならないということ、信心即名号ということが言える。そのため、衆生の信心と仏の名号との関係をあらわすものと取れる。つまり如来の至心である名号が、衆生に与えられたことで衆生の至心となるのである。⁵⁵

次に「信樂」について考察する。信樂については、

信樂といふは、すなわちこれ如来の満足大悲円融無礙の信心海なり。このゆゑに疑蓋間雜あることなし。ゆゑに信樂と名づく。すなはち利他回向の至心をもつて信樂の体とするなり。（中略）この虚仮雜毒の善をもつて無量光明土に生ぜんと欲する、これかならず不可なり。（中略）この心はすなはち如来の大悲心なるがゆゑに、かならず報土の正定の因となる。如来、苦悩の群生海を悲憐して、無礙広大の浄信をもつて諸有海に回施したまへり。これを利他真実の信心と名づく。⁵⁶

と説かれた。まず「利他回向の至心をもつて信樂の体とするなり。」とは如来から回向された至心である名号を受け入れることを信樂ということをあらわされた。また、「虚仮雜毒の善をもつて無量光明土に生ぜんと欲する、これかならず不可なり。」とは、自力の行では真実報土へ往生できないことを述べている。自力の行は煩惱に汚されており、そのような状態の行によって浄土往生することが難しいということである。「如来の大悲心なるがゆゑに、かならず報土の正定の因となる。如来、苦悩の群生海を悲憐して、無礙広大の浄信をもつて諸有海に回施したまへり。これを利他真実の信心と名づく。」とは、梯氏は「大悲心は仏道の正因ですから、大悲心であるような如来の無疑心（信樂）が衆生に回向されるとき、真実報土に往生し成仏する正定の因となるわけです。」⁵⁷

と述べられている。つまりその因により如来が苦悩に満ちた衆生を憐れむ、大悲心により往生をさせようと回向されているすがたが信樂ということである。

次に「欲生」について、

欲生といふは、すなはちこれ如来、諸有の群生を招喚したまふの勅命なり。すなはち真実の信樂をもつて欲生の体とするなり。まことにこれ大小・凡聖、定散自力の回向にあらず。ゆゑに不回向と名づくるなり。(中略) 利他真実の欲生心をもつて諸有海に回施したまへり。欲生すなはちこれ回向心なり。これすなはち大悲心なるがゆゑに、疑蓋雜はることなし。⁵⁸

と説かれている。「如来、諸有の群生を招喚したまふの勅命なり。」について梯氏は「私がおこそうとしておこせるものではなくて、如来の「必ず往生させる」という大悲招喚の勅命を疑いなく聞いて喜ぶ信心のほかにおこりえないことを知らせようとされた」⁵⁹と述べられている。つまり、必ず往生させるということが欲生である。また「不回向」とは衆生がつんだ功徳を浄土に回向し往生を願うことではなく、如来により回向されているものであるため不回向といわれたのである。

次に「信文類」の「結示」に、

至心・信樂・欲生、その言異なりといへども、その意これ一つなり。なにをもつてのゆゑに、三心すでに疑蓋雜はることなし、ゆゑに真実の一心なり。これを金剛の真心と名づく。金剛の真心、これを真実の信心と名づく。真実の信心かならず名号を具す。名号はかならずしも願力の信心を具せざるなり。⁶⁰

と説かれた。「至心・信樂・欲生、その言異なりといへども、その意これ一つなり。」とは三つのことばのもつ意味は異なるが、如来が成就して回向されている心であり、それを衆生は疑いを雑えず受けとる心である。つまり無疑心であり、信樂におさまるということをあらわしている。⁶¹次に「真実の信心かならず名号を具す。名号はかならずしも願力の信心を具せざるなり。」と説かれる。梯氏は、「行を重視して信を軽視したり、信を重視するあまり行を軽視したりすることは本願を取捨する不敬になります。そこで真実信心には名号を称念する行を具して、決して行を離れた信ではない」⁶²と述べられた。「真実の信心かならず名号を具す」とはこのことである。また、信心を具していない称名とは念仏する行者が如来により回向されていることに気付かず、自分が称念することで積んだ功徳を如来へ衆生自身が回向して往生しようとする自力念仏のことである。

また「信文類」に、

「聞」といふは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふなり。「信心」といふは、すなはち本願力回向の信心なり。

と説かれた。「生起本末」とは、本願による救いを起こした理由が「生起」であり、その本願がどのように誓われ、どのような行により成就されていたのかという因が「本」である。また「末」はその願と行が成就し、阿弥陀仏の救いはたらしきことである。つまり、「聞」とは名号による阿弥陀仏の衆生への疑いを雑えない救いを聞くということである。また「信心」とは本願の名号を聞信している本願力回向の信心である。

第三節 法然と親鸞の差異についての検討

第一項 称名念仏による差異

まず法然と親鸞の称名念仏について検討していく。どちらも称名が正定業であり念仏により救われていくという点では同じである。しかしながら少し思想が違うようである。左記に差異を示した。

● 法然

- ・ 念仏による救い
- ・ 称名念仏することは本願に誓われた願いによるものである。
- ・ 念仏往生を説かれた。

● 親鸞

- ・ 名号による救いである。
- ・ 名号は本願招喚の勅命であり、仏により回向され称名念仏せしめられている。
- ・ 衆生による回向ではないため不回向といわれる。
- ・ 衆生はすでに正定聚の位に至っている。
- ・ 念仏成仏を説かれた。

まず法然は阿弥陀仏により選定された念仏であることを述べる。その称名する南無阿弥陀仏の名号には一切の功德が具わり勝行であることを述べる。またこの行は阿弥陀仏が私たちを平等に救おうとされる阿弥陀仏の具現

であり、誰もが救われていくことのできる易行であると説かれる。つまり阿弥陀仏の願いにより称名念仏することで救われていくということである。しかし往生するためには信心を具足しなくてはならないと説くのである。

次に親鸞である。親鸞は称名念仏を大行であると述べる。名号を称えることで無明の煩惱を破り、衆生の一切の願いを満たすと述べる。また称名は正定業であり、南無阿弥陀仏の名号であると説いている。またその名号すべてが本願招喚の勅命であり、如来が私たちに浄土へ生れさせたいとはたらきかけ、名号として衆生の上にあられ乃至十念の称名となり顕われるものである。また、その本願招喚の勅命を疑いなく受け入れ、阿弥陀仏より回向された選択本願の行をいただいて称えるものが称名念仏なのである。さらに、その名号の徳により、もはや迷いの世界に転落することがなくなり、不退の位に至ることを獲ていることを説かれるのである。また名号は阿弥陀仏の他力によって私たち衆生を救おうと声を通して顕われているものであり、私たちによる回向ではないと不回向の行であることを述べられるのである。そして、親鸞は念仏往生ではなく念仏成仏とさらに展開するのである。真実報土へ往生するため即の時成仏するからである。また、阿弥陀仏により行信を与えられたならば煩惱具足である衆生のまま正定聚の位にたっていると説くのである。つまり親鸞にとって称名念仏とは行ではなく、称名は阿弥陀仏の救いが働いている相であり、本願招喚の勅命である。

このように法然は念仏による阿弥陀仏の救いを説き、親鸞は名号による阿弥陀仏の救いを説くのである。法然の念仏と親鸞の念仏では一つ大きく分かれるところがある。法然は念仏を行として考えられているが、親鸞は私たち衆生が行ずるものではないことを説かれるのである。両者ともに名号には衆生を救うための一切の徳があり、

平等に救いたいという阿弥陀仏の願いによることを説くのである。しかし、さらに親鸞は南無阿弥陀仏の名号に着目し、名号が如来が衆生を浄土へ往生させたいという本願招喚の勅命であることを明かした。つまり称名念仏は衆生の声を通してあらわれる阿弥陀仏の回向として捉えられたのである。さらにこの念仏により真実報土へ往生するため即の時成仏することを証し、法然の念仏往生から念仏成仏へとさらに展開されたのである。以上が称名念仏の差異である。

第二項 信心による差異

法然と親鸞の信心の差異について検討する。法然も親鸞も信心を具足しなければ往生できないことを説かれる。

● 法然

- 『観経』の三心を用いている。
- 第十八願を疑いなく信じる心が信心であるとされた。
- 衆生自身が本願を疑わず、深く信じなくてはならない。
- 念仏により自然に信心は具えることができる。

● 親鸞

- 『大経』の三心を用いている。
- 本願回向の信心
- 衆生は疑いを交えない、阿弥陀仏の回向による信心である。

● 常に信心は阿弥陀仏に回向されてるため、すでに具わっている。

● 称名は信心がすでにそなわっていることを知らせているのである。

まず法然は『観経』の三心を信心として説かれ、また親鸞は『大経』の三心を信心として説かれるのである。まず法然による至誠心について、真実心であり愚者は愚者のままのかざらないありのままの心としてとかれるのである。しかし親鸞は至心が名号を聞くときに与えられる法の徳であることを説くのである。至心とは名号そのものであり衆生の信心と仏の名号との関係をあらわすものなのである。法然は至誠心を衆生の心の真実心として顕されるが、親鸞は阿弥陀仏の心そのものが顕われている名号が真実心であると説いているのである。

次に法然による深心とは、二種深信のことであり、本願を信じることで阿弥陀仏のさとりに往生できること信じるのが深心であると説いているのである。しかしながら親鸞は、信樂について、煩惱に汚されている中で自力の行によって浄土往生することが難しいため、如来が苦悩に満ちた衆生を憐れみ、大悲心をおこされ往生をさせようと回向されているすがたとしとらえられた。

また法然による回向発願心とは過去世および今生において自分の積んだ善根や、他人の積んだ善根を喜び、それを真実の深信をもって往生のためにふり向ける心として説いている。次に親鸞は欲生とは必ず往生させるという阿弥陀仏の心であり、また衆生がつんだ功徳を浄土に回向し往生を願うことではなく、如来により回向されているものであるため不回向と説かれているのである。

これらの三心が両者、一つの心としてみられるのである。まとめると法然は真実の心をおこして深く本願を信

じ、往生を願う心という私たち衆生側がおこす心が信心としてとかれ、親鸞は名号により衆生を救いたいと回向されている阿弥陀仏の心が信心とされているのである。つまり法然は衆生側がおこす心であり、親鸞は阿弥陀仏により回向される信心と説いたのである。ここが信心についての差異である。

また法然は深心、親鸞は信樂に信心がおさまると述べる。その信心がどのようにして具足するのかについて、まず法然は深心を具えると必ず往生できるとし、その深心が念仏することにより自然に具足するものとされたのである。また如来の願心を知らされること、深心であり、願心に気付かせる手だてが念仏であるとし、念仏すれば必ず三心は具足することを説かれたのである。また親鸞は、信樂とは名号による阿弥陀仏から衆生への疑いを雑えない救いを聞くこと、本願力回向の信心が信心なのであると説くのである。

つまり法然は信心を具足するためには念仏をすることを説くが、親鸞は信心は常に阿弥陀仏により常に回向され与えられているものであり、そのことを知らせることが念仏なのであると説いた。これにより両者は称名念仏を勧められてきた⁶³のではないかと考察する。

結論

今回法然と親鸞の関係を窺うにあたり、称名念仏と信心に焦点をあてて考察してきた。

まず称名念仏は両者ともに名号には衆生を救う一切の徳があり、平等に救いたいという阿弥陀仏の願いにより念仏することが説かれる。しかし親鸞はこれをさらに展開し称名念仏は阿弥陀仏より回向されるものとして捉えた。また、この念仏により法然の念仏往生から念仏成仏へとさらに展開されたのである。また法然は、念仏を行として考えられたが、親鸞は私たち衆生が行ずるものではないことを説かれるのである。つまり称名念仏は法然の教えをさらに展開されていると考察したのである。

また信心について法然は、衆生側がおこす心であり具足するために念仏をすることを説くのである。しかし、親鸞は阿弥陀仏により回向される信心と説いており、信心は常に阿弥陀仏により回向され与えられているものであり、そのことに気付かせるものが念仏と説くのである。これにより両者は称名念仏を勧められてきたのである。つまり法然は本願を深く信じる心（深心）を信心とされるが、親鸞はその本願を信心として説かれたのである。これも法然の教えをさらに展開されていると考察する。

最後に称名念仏と信心をみる限りでは法然の教えをそのまま受け継がれたとはいえない。だからといって全く違うことを説かれたのではない。一部分だけでもいえない。つまり法然の教えをそのまま受け継ぎ、さらに展開されたと考察する。

- 1 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』四六三頁
 2 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』三二五頁
 3 『浄土真宗聖典（註釈版）』一八頁
 4 『浄土真宗聖典（註釈版）』一〇八頁
 5 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』四五五頁
 6 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』四五七頁
 7 浅井成海『日本浄土教の諸問題』一九八頁
 8 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』四六四頁
 9 浅井成海『日本浄土教の諸問題』一九八頁
 10 「はかりみれば、それすみやかに生死を離れんと欲はば、二種の勝法のなかに、しばらく聖道門を閑きて選びて浄土門に入るべし。浄土門に入らんと欲はば、正雑二行のなかに、しばらくもるもるの雑行を抛てて選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲はば、正助二業のなかに、なほ助業を傍らにして選びて正定をもつばらにすべし。」（『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一二八五頁）
 11 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一二八五頁
 12 石井教道『選択集全講』六六六頁
 13 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一二八五頁
 14 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一一九三頁
 15 梯實圓『法然教学の研究』七七頁
 16 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一二〇七頁

17 「勝劣の義とは、念仏における所稱の名号には如来所有の内証、外用等の一切の功德が撰在して、これを領受している念仏は、無量の徳をもっているから最勝の行である。それに対して諸行は、その一々を修行して、やがて仏果の一分一分を莊嚴するようになるもので、仏法中の一隅を守るに過ぎないから劣行である。（中略）名号はただ万徳の所歸であるというだけでなく、その名号を称えるものを無漏の報土へ生ぜしめようという本願があるから、万徳所歸の名号が、それをいだいて称える衆生の無明を破し、その本願力の自ずからなるはたらきとして決定往生をせしめるのである。この本願なき諸仏名号と、選択本願の名号との決定的なちがいがあるといわれるのである。」（梯實圓『法然教学の研究』二二五頁～二二八頁）
 18 「難行は平等の慈悲にかなわないという意味において随他意の法門であり、易行念仏は、平等の大悲を満足する随自意真実の法門であるということになる。かくて仏の随自意である平等の大悲に催されて行われた行業の選択において雑行たる諸行は必然的に選捨され、易行たる念仏一行が選取されたものである。易行の念仏とは、万機を平等に救おうとする平等の大悲の具現であるといえよう。我々が難行を捨てて易行に帰するということは、ただ人間の咨意によって、むずかしいからやめる、易しいから行ずるといような私的な次元の話ではなくて、真実なる仏意にかなうか否かの問題なのである。」（梯實圓『法然教学の研究』二三二頁）

- 19 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一二八四頁
 20 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一二三一頁
 21 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一二四七頁
 22 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一二四八頁
 23 浅井成海『浄土教入門』八四頁
 24 「外も内もありのまゝにて、かざる心のなきを、至誠心とはなづくるにこそ候めれ。」（『浄土宗全書』第九卷 五五〇頁、五五一頁）とも述べられる。
 25 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一二四八頁
 26 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一二四七頁
 27 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』一二四九頁
 28 『浄土宗全書』第九卷 五一一頁
 29 『昭和法然上人全集』三二頁、三三頁
 30 『浄土宗全書』第九卷 五五二頁、五五三頁

3 1 浅井成海『日本浄土教の諸問題』一八八頁
3 2 『昭和新修法然上人全集』四六八頁
3 3 『昭和新修法然上人全集』四六七頁
3 4 浅井成海『日本浄土教の諸問題』二〇七頁
3 5 『浄土真宗聖典（註釈版）』一四一頁
3 6 村上速水『教行信証を学ぶ』五二頁
3 7 『浄土真宗聖典（註釈版）』一八頁
3 8 梯實圓『聖典セミナー「教行信証教行の巻」』一九八頁
3 9 『浄土真宗聖典（註釈版）』一四六頁
4 0 梯實圓『聖典セミナー「教行信証教行の巻」』二〇一頁
4 1 村上速水『教行信証を学ぶ』五四頁
4 2 名号について「六字釈」を基に検討していく。「行文類」と『愚禿鈔』の「二河譬釈」に、「南無」の言は帰命なり。（中略）「帰命」とは本願招喚の勅命なり「発願回向」といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり。「即是其行」といふは、すなはち選択本願これなり。「必得往生」といふは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり。（『浄土真宗聖典（註釈版）』一七〇頁）「護」の言は、阿弥陀仏果成の正意を顕すなり、また撰取不捨を形すの貌なり、すなはちこれ現生護念なり。（『浄土真宗聖典（註釈版）』五二九頁）と説かれた。

まず、ここで述べられる「南無」と「帰命」については、村上氏によると「如来が我々にはたらきかけてくるすがた、すなわち能回向の相をあらわすもので、如来は喚び声をもって往生の因果一切を我々に与えられることを示すものである。」（村上速水『教行信証を学ぶ』五九頁）と述べられた。また梯氏は、「われをたのめ」（梯實圓『聖典セミナー「教行信証教行の巻」』二三九頁）と表現されている。つまり阿弥陀仏自身が救いたいとあらわれる相であると考察した。また、「阿弥陀仏」とは、「撰取して捨てず」という本願の名」（梯實圓『聖典セミナー「教行信証教行の巻」』二三九頁）「必ず救う」（梯實圓『聖典セミナー「教行信証教行の巻」』二三九頁）と梯氏は示している。つまり南無阿弥陀仏とは「われをたのめ」、「必ず救う」ということになる。したがって南無阿弥陀仏全体が本願招喚の勅命である。

次に「発願回向」については、梯氏は「如来が苦しみ悩む衆生を哀れんで、安らかなさどりの世界である浄土へ生れさせようと願いたたれたことを発願といい、往生の業因として南無阿弥陀仏を選び取って、それを衆生に施し与えようと思し召された大悲の願心を回向と釈されている」（梯實圓『聖典セミナー「教行信証教行の巻」』一〇四頁）と述べられる。村上氏は、「発願回向とは能回向の心」（村上速水『教行信証を学ぶ』六〇頁）と述べられている。つまり、「発願回向」とは如来が私たちに浄土へ生れさせたいとはたらきかけてくる心のことである。

また「即是其行」について、村上氏は「如来の上に成就した功德（即是其行）が我々に回向されては称名（選択本願之行）となつてあらわれている（中略）如来のはたらきかけそのもの、すなわち所回向の行をあらわすものである。」（村上速水『教行信証を学ぶ』六一頁）と述べられた。つまり、如来が名号として衆生の上にあらわれ乃至十念の称名となり、如来がはたらきかけていることである。また「阿弥陀仏」の意味でもある。（『浄土真宗聖典（註釈版）』六五六頁）

次に「必得往生」については、梯氏によると「本願招喚の勅命を疑いなく受け入れ、阿弥陀仏より回向された選択本願の行をいただいて称えているものは、もはや迷いの境界に退転し、転落することがなくなり、不退の位に至ることを獲ていることをあらわしている」（梯實圓『聖典セミナー「教行信証教行の巻」』二四五頁）ということである。

- 4 3 『浄土真宗聖典（註釈版）』一八六頁
4 4 村上速水『教行信証を学ぶ』六五頁
4 5 梯實圓『聖典セミナー「教行信証教行の巻」』二五七頁
4 6 灘本愛慈『顕浄土真実行文類講述』一三〇頁
4 7 『浄土真宗聖典（註釈版）』一八六頁
4 8 梯實圓『聖典セミナー「教行信証教行の巻」』二六五頁
4 9 灘本愛慈『顕浄土真実行文類講述』一三三頁
5 0 『浄土真宗聖典（註釈版）』一八七頁
5 1 梯實圓『聖典セミナー「教行信証教行の巻」』二七五、二八一頁
5 2 『浄土真宗聖典（註釈版）』二一一頁
5 3 梯實圓『聖典セミナー「教行信証信の巻」』九四頁
5 4 『浄土真宗聖典（註釈版）』二三一頁、二三四頁
5 5 村上速水『教行信証を学ぶ』一二三頁、梯實圓『聖典セミナー「教行信証信の巻」』一九〇頁、一九一頁にも述べられている。

⁵₆ 『浄土真宗聖典（註釈版）』二三四頁
⁵₇ 梯實圓『聖典セミナー「教行信証信の巻」』二一二頁、村上速水『教行信証を学ぶ』一二四頁・一二五頁・一二九頁にも述べられている。
⁵₈ 『浄土真宗聖典（註釈版）』二四一頁
⁵₉ 梯實圓『聖典セミナー「教行信証信の巻」』二二二頁、村上速水『教行信証を学ぶ』一三三頁にも述べられている。

⁶₀ 『浄土真宗聖典（註釈版）』二四五頁

⁶₁ 『浄土真宗聖典（註釈版）』二三〇頁

⁶₂ 梯實圓『聖典セミナー「教行信証信の巻」』二五七頁、村上速水『教行信証を学ぶ』一四一頁にも述べられている。

⁶₃

信心獲得した後の称名念仏について親鸞の報恩観を基に考察する。先哲によると覚如、蓮如の報恩と異なっているようである。（日野正照「親鸞における称名報恩の研究」『真宗研究会紀要』第三〇号一九九八年）
玉木興慈「親鸞における報恩の意味」『印度学仏教学研究』第九〇号一九九七年、嬰木義彦「親鸞教学における称名報恩の思想」『真宗学』第六四号一九八一年）

では親鸞の称名報恩について日野氏は、
自身の中に沸き起こる慶喜のおもいを、自らの殻の中に閉じ込めずに、他者に伝えようとすることは、
真実に触れた人の自然な姿なのでわないだろうか。如来の勅命を聞き受け、信心を回施されたものは、
その如来の救済の確かさを領き、それを慶び讃嘆することとなる。その弥陀を讃嘆する行為（自信）が、
未信の他者に弥陀の本願の世界を開く機縁（教人信）となるといえよう。（日野正照「親鸞における称名報恩の研究」『真宗研究会紀要』第三〇号七七一頁）

と述べられている。また玉木氏は、
獲信者は往相の菩薩であり、自利を行じつつ利他を行ずることのできる存在であり、大悲を行じるひとなのである。その利他行が報恩を意味しているのであるが、凡夫として生き続ける限り、報恩は意識的なものではなく、念仏の自然のはたらしきによって報恩になるということである。獲信者が未信の者を獲信させたから、報恩の意味になるというだけであって、獲信者が「報恩」の称名を称えるのではないのである。（玉木興慈「親鸞における報恩の意味」『印度学仏教学研究』第九〇号四七頁）

と述べられている。つまり親鸞の報恩観は衆生が信心を獲得した後、自身以外のものを救うための念仏へと

かわり、阿弥陀仏が未信の者を名号を聞くことで救いとろうとされることなのである。しかしながら、衆生が行う報恩ではなく、衆生はただ慶喜して念仏を称えるだけなのである。

参考文献

- 教学伝道研究センター 『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版社二〇〇四年
教学伝道研究センター 『浄土真宗聖典七祖編（註釈版）』本願寺出版社一九九六年
浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局 『浄土宗全書』第九巻 山喜房仏書林 一九七三年
石井教道 『昭和新建法然上人全集』平樂寺書店 一九五五年
本願寺教学伝道研究所 『顕浄土真実教行証文類（上）』本願寺出版社二〇一一年
藤嶽明信 『本願念仏の開頭―選撰本願念仏集』講讃―真宗大谷派宗務所出版部 二〇一一年
浅井成海 『日本浄土教の諸問題』永田文昌堂 二〇一一年
梯實圓 『聖典セミナー「教行信証信の巻」』本願寺出版社 二〇〇八年
普賢保之 『尊号真像銘文講読』永田文昌堂 二〇〇六年
梯實圓 『聖典セミナー「教行信証教行の巻」』本願寺出版社 二〇〇四年
黒田覚忍 『はじめて学ぶ七高僧―親鸞聖人と七高僧の教え―』本願寺出版社 二〇〇四年
岡亮二 『「教行信証」に問う』永田文昌堂 二〇〇一年
村上速水 『教行信証を学ぶ』永田文昌堂 一九九六年
星野元豊 『講解 教行信証 信の巻』法藏館 一九九四年
中井玄道 『教行信証講話』法藏館 一九九四年
浅井成海 『浄土教入門』本願寺出版 一九八九年
灘本愛慈 『教行真実行文類講読』永田文昌堂 一九八九年
梯實圓 『法然教学の研究』永田文昌堂 一九八六年
藤田宏達 『善導』講談社 一九八五年
村上速水 『親鸞教義とその背景』永田文昌堂 一九八三年
星野元豊 『講解 教行信証 教行の巻』法藏館 一九七七年

石田充之 『親鸞教学の基礎的研究(二)』永田文昌堂 一九七七年
信楽峻磨 『浄土教における信の研究』永田文昌堂 一九七五年
石井教道 『選択集全講』平楽寺書店 一九六七年
石田充之 『鎌倉浄土教成立の基礎研究』百華苑 一九六六年
藤原凌雪 『念仏思想の研究』永田文昌堂 一九五七年

参考論文

内藤知康 「『行文類』称名破満積の解釈について」『龍谷大學論集』第四九〇号 二〇一二年
清水谷正尊 「法然における念仏と信心」『日本浄土教の諸問題』永田文昌堂 二〇一一年
山高秀介 「浄土の開示―『信卷』信楽積の考察―」『印度学仏教学研究』第一一九号 二〇〇九年
川添泰信 「親鸞浄土教における師弟の問題―『真宗研究』第五三三号 二〇〇九年
稻城選恵 「親鸞上人の『大行』について―法然聖人と親鸞聖人における諸行往生の否定を中心として―」『宗学院論集』第七九号 二〇〇七年
生桑崇等 「善導・法然・親鸞の念仏観の一考察」『宗学院紀要』第一五号 二〇〇七年
利井唯明 「法然における深心積の一考察(一)―二種深信の分科について―」『行信学報』第一九号 二〇〇六年
利井唯明 「法然の信心観―至誠心積の諸問題について―」『行信学報』第一八号 二〇〇五年
浅井成海 「親鸞の愚禿の信心」『大法輪』第一二二号 二〇〇四年
千葉考史 「中国浄土教における善導の念仏思想」『龍谷教学』第三八号 二〇〇三年
廣田万里子 「三心具足の念仏―法然の信心論―」『真宗教学研究』第二四号 二〇〇三年
中臣至 「法然上人と親鸞聖人の伝記に関する一考察」『宗学院論集』第七四号 二〇〇二年
中臣至 「法然と親鸞の三心積」『印度學佛教學研究』第四十七卷第二号 一九九九年
日野正照 「親鸞における称名報恩の研究」『真宗研究会紀要』第三〇号 一九九八年
玉木興慈 「親鸞における報恩の意味」『印度学仏教学研究』第九〇号 一九九七年
川添泰信 「親鸞における祖師観形成の問題」『真宗学』第八四号 一九九一年

貫名謙 「法然・親鸞の念仏思想(序)」『印度學佛教學研究』第四四卷第一号 一九九〇年
嬰木義彦 「親鸞教学における称名報恩の思想」『真宗学』第六四号 一九八一年
小林尚英 「善導大師の称名念仏論」『大正大学大学院研究論集』第四号 一九八〇年
坪井俊映 「法然浄土教における三心具足の過程について」『法然上人研究』隆文館 一九七五年
藤本淨彦 「決定深信の世界―二種深信の構造と内容をめぐる哲学的考察―」『法然仏教の研究』山喜房佛書林 一九七五年
石田充之 「法然教学より親鸞教学への展開」『真宗学』第四七、四八号 一九七三年
信楽峻磨 「親鸞における念仏と信心」『真宗学』第四五・四六号 一九七二年
信楽峻磨 「法然における信の思想」『真宗学』第三七号 一九六七年
梯實圓 「法然上人の三心積義」『行信学報』第五号 一九六一年